

ふさわしい統治~人類と公正な世界秩序への歩み~

国際連合創設 75 周年に寄せて（声明）

バハイ国際共同体

人類が互いに結び付き、相互依存していることへの認識が、急速に移り変わる世界の現実によって深まる中、国際連合は創設 75 周年を迎えています。世界を呑み込んでいるパンデミックが生み出し、その勢いがいや増している混乱のさなかにあっても、世界に安定をもたらし、住民の暮らしを豊かにする、際立った社会変化に向かう可能性が、多数、開かれようとしています。歴史を通じて、騒乱という時期は、集団の価値感とそれらの底流をなす想定を定義し直す機会をもたらしてきました。今も、また、その時です。確立された制度と手法が根本的な変革を求められている領域が広範囲におよぶ現状は、国連創設 75 周年から 100 周年にあたる、これからの四半世紀が、人類の命運を決定するうえでいかに重大であるかを物語っています。恒久かつ普遍的な平和に向けて、わたしたちがこれまでともに歩んできた軌跡を、断固として前へ進めるよう求める声が、一斉に鳴り響いています。この声は、応えられなければならない呼びかけです。人類は一つの家族です。これは世界中の多くの人々が受け容れている真実です。この真実がわたしたち皆の行動に及ぼす深遠な影響がゆえに、社会および政治的な和合のさらなる高みへと向かう協調的な運動が、今、湧きおこらなければなりません。一世紀以上前にバハオウが述べたように、「真実の平和と静穏は、あらゆる人々が人類すべての安寧を願う者とならない限り、実現しない」のです。国際社会が内部分裂する危険性は到底許容できません。

過去一世紀、国際平和と人類すべての繁栄を保証できる世界秩序の礎を築くうえでの、いくつもの、不完全ながら重大な歩みがありました。世界的な統治に向けた人類初の本格的な試みであった国際連盟は 25 年間存続しました。国際連合の存続期間が、すでにその 3 倍に達したことに感銘を覚えます。事実、世界中のすべての国を関与させる構造体としても、人類の共通意思を表現するフォーラムとしても、国際連合に匹敵するものはありません。けれども、次々に発生し相互に絡み合う脅威に立ち向かうには、現行の取り決めではもはや十分ではないことが、昨今の出来事から実証されています。それゆえ、統合と協調をより一層、広げなければなりません。前進に向けた実行可能な道は、世界的な協力を深める体系にのみ存在します。75 周年という現在の節目は、国際社会がいかにしてその組織化を改善できるかについての合意づくりを開始し、何を進歩の測定基準とするかを検討するのに適切な時期です。近年、多国間協定にまつわる理性的な批判が、ルールに基づいた国際秩序という観念そのものの拒絶により、時に、その輝きを失うことがあったのです。

しかし、押し戻しが生じているこの時期は、世界という多様性に満ちた共同体を、さらに堅固な和合へと運んでいく、より広大な歴史のプロセスの中に埋め込まれているのです。人類の歴史の各段階において、より複雑性の高い統合が可能となるだけでなく、必要となります。より強い緊迫性をはらんだ新たな難問が出現することで、国家は、より大きな包括性、一貫性、協力を通して、その時代の諸課題に対処する新たな取り決めを考案するよう迫られます。現在の時代の要求は、国家間の審議を促進するよう、現行の諸機構を急ぎ立てています。紛争解決のための諸制度もまた、その有効性を発揮するべく、それらの能力を越えるほどに急ぎ立てられています。それゆえ、わたしたちは、これまでとは一線を画した仕事にとりかかろうとしている自分自身を発見します。それは、同じ祖国の一つの民であるとはつきりと認識しながら、自らの課題に決意をもって系統的に取り組むという仕事です。

人類家族の一体性を認めることは、画一性を求めることでも、すでに広範囲にわたり確立されている統治機構の放棄を求めることでもありません。人類の一体性の意味を真に理解するには、多様性という概念の理解がその一環として不可欠です。今日、必要とされているのは、世界中のさまざまな制度や文化を保存しながら、あらゆる国からの支持を得られる集合的な共通的価値観と原則とを具現化する合意に達することです。これらの共有の原則と基準を軸にした一定の同意は、地球規模の課題に本質を与える、普遍的な人権、必須たる貧困の撲滅、環境破壊を起こさない範囲で生活する必要性、などの理念の中にすでに見て取ることができます。けれども、さらに進み、こうした理念に含意される挑戦的課題について検討しなければなりません

和合、そして正義という共通の倫理への献身を礎に、多様な手法を調整する枠組みがあれば、無数の合意形成や策定において、共通する原則を実践できるようになるでしょう。こうした枠組みの中では、政治的構造、法制度、社会的機構の違いは、摩擦点でなく、新たな解決と手法へと向かう潜在的な洞察の源泉となるでしょう。そして、国家が、互いからの学び合いに取り組む限り、争いと非難という根深い習慣に替えて、協力と探究の文化を築き、失敗と失策を学びのプロセスに必須の側面として意欲的に受け入れることを新たな習慣にすることができます。

世界的な相互依存を真に認めるには、誰彼と区別することのない、すべての人への真正の思いやりが求められます。一見、単純ですが、この原則には、優先順位を深遠な見地から見直すという意味が含まれています。共通善の推進は称賛に値しても、二義的な目標として追求されることがほとんどです。狭小な国家利益の確保が最優先されているからです。これは改めなければなりません。人類の中のいかなる区分に属する人々も、その幸福は、人類全体の幸福と密接に結び付いているからです。いかなる計画や政策であれ、それらがあらゆる社会的階層に及ぼす影響を検討することから、協議は開始しなければなりません。それゆえ、地方、国家、国際社会のいずれであろうと、指導者も、政策立案者も、あらゆる行動計画案において、その利点を検討する際に重大な問いに直面

します。それは、その一つの決定が人類全体の善を推進しますか、という問いです。国家主権という過去の概念からいかなる恩恵が生じていたにせよ、現在の状況は、分析と意思決定において、はるかに包括的で一貫性のある手法を強く求めています。国内政策がどんな影響を世界に及ぼすでしょうか。どのような選択をすれば、繁栄を分かち合い、持続可能な平和に貢献するでしょうか。どのような手段が、崇高さを養い、人の尊厳を保つでしょうか。人類の一体性への認識が意思決定プロセスの中に少しずつ織り込まれていくにつれて、国家は、この惑星、地球を責任をもって管理し、そこに暮らす人々の繁栄を確かなものとしていく中で、より容易に、お互いを正真正銘の同胞として認めることができるようになるでしょう。

眼前の政策の影響を指導者が検討するとき、非常に多くの人々が人間の精神と呼ぶであろう、意味を求め、超越を切望する本質について考える必要があります。人間の存在の中でも、実体性が薄いこうした側面は、個人が信じるものの領域に限定され、政策立案者や行政職者の関心外にあると見られることが一般的です。しかし、すべての人々の進歩は、物質的な進歩が精神および倫理的な進歩から切り離されると達成不可能であることが、経験から明らかにされています。たとえば、ここ数十年間の経済的成長は、明らかに、多くの人々に繁栄をもたらしました。しかし、正義と公正さを欠いた成長であるため、ごく限られた少数の者たちがその果実を享受し、多数の人々が不安定な状況に置かれています。

貧困の中で暮らす人々は、いかなるものであれ、世界経済の縮小に起因する最大の危険にさらされています。この経済の縮小は、現行の不平等を悪化し、苦しみを激化させています。社会を発展させるためのいかなる努力も、たとえそれが物質的な状態にのみ関わる場合であったとしても、その成否は、その背景をなす倫理的な想定に依っています。あらゆる政策には、人間性についての確信、さまざまな社会的目標を推進する価値観、権利と責任が互いに働きかけ合う仕組みが、反映されています。そして、いかなる決定においても、普遍的な利益がどれほど生じるかを決定づけるのは、これらの想定なのです。したがって、どういう信念、価値観、仕組みとするかは、綿密かつ正直に検討されなければなりません。物質的な進歩を、精神的かつ社会的な進歩に意識的に結びつけることを確実にすることによってのみ、約束されたより良い世界を成就できるのです。

より対等で真に協力的な国際関係に向かう運動には、最終的に、世界の指導者たちが一堂に集まり、世界秩序を再構成し、再編成するというプロセスが最終的に必要とされるでしょう。かつては国際協力の理想像として捉えられていたものは、人類に振りかかる、紛れもなく深刻な課題に照らせば、実際に必要なものとなりました。それゆえ、こうした方向に向かう段階が実効的であるかどうかは、常套化した膠着状態と行き詰まりが放棄され、世界市民としての倫理が支持されるかどうかにかかってきます。審議の過程は、より寛容で、理性的で、誠意あるものである必要があるでしょう。つまり、それは、常任的な立場や狭小な利益への執着ではなく、複雑な問題への理解を共に深めるための集

团的探究に動機づけられる必要があります。共通善の追求にそぐわない目標は、退けられる必要が生じていきます。この倫理観が優勢を得ない限り、永久の進歩は達成しがたいことが判明していくでしょう。

このような姿勢は、長所を段階的に伸展させつつ、展開する現実に対応するという、進歩に向けてプロセスに重点をおく手法を強化します。そして、いかなる提案においても、その利点を理性的かつ冷静に問う集団的能力が成長するに伴い、さらなる審議を受ける価値がさまざまな改革案に生じます。たとえば、代表が直接選出される国連総会の上院、いわゆる、世界議会議、の設立が可決されるなら、人々がこの世界的な機関との間にもつ正当性と繋がりを大いに強めることができるでしょう。将来の諸事が世界評議会で協議されるようになれば、さまざまな政策が将来世代に及ぼしう影響の検討のあり方を制度化したり、地球規模の危機に対する備え、新興技術の利用、教育や雇用の未来などの、さまざまな問題に注意を払えたりするようになるでしょう。

自然界に関連する法的枠組みが強化されるなら、生物多様性、気象、環境への管理体制に一貫性と活力が与えられ、地球資源を責任をもって共有管理する体系に頑健な基礎がもたらされるでしょう。安全保障理事会自体の改革を含め、平和を促進し維持するための全体的基盤が改革されるなら、慣例化している機能麻痺と行き詰まり状態が払拭され、断固とした姿勢で紛争の脅威に対応できるようになるでしょう。こうした新たな取り組みや、これらに匹敵する革新的試みを導入するなら、より焦点を絞った審議が求められます。さらに、承認と正当性を勝ち取るには、各取り組みに賛同する全体的合意が必要となるでしょう。いうまでもなく、これら自体は、人類のニーズを満たすには十分ではありません。しかし、それらが、今日存在するものを改善するものである限りにおいて、各々は、真に変容的な成長と発展のプロセスに、その持ち分を寄与できるでしょう。

国際社会が、その建設に向けて献身的に取り組んでいる世界、たとえば、暴力と汚職が平和と善の統治に取って代わられ、男女平等が社会生活のあらゆる側面に浸透している世界は、いまだ存在していません。それゆえ、地球規模の課題に謳われている目標に向けた進歩には、実験、探求、イノベーション、創造性、に向かう意識的な方向性の選択が求められます。こうしたプロセスの展開に伴い、国連憲章ですでに定義されている道義的枠組みは、ますます、その枠組みどおりに忠実に適用しなければなりません。国際法への敬意、基本的人権の支持、条約と同意事項への順守が、実際に献身的に取り組まれる限りにおいて、国際連合とその加盟国は世界人民を前にして高潔さと信頼性の基準を実証できるのです。これを妨害するなら、行政組織をどんなにたくさん再編成したとしても、私たちの眼前にある積年の多数の問題は解決されないでしょう。バハオウが述べられたように、「言葉は行いで裏付けられなければならない。行いは言葉を真に試すからである」。

国際連合が最初の一世紀を締め括ろうとする時期の何年間は、計り知れないほどの機会に満ちた期間です。過去の時代には夢想されなかった規模で、協力が可能となり、進歩のための比類のない展望が開かれます。しかし、効果的な国際協調を支持する取り決めに達し損ねれば、昨今の分裂状態から生じた結果よりも、はるかに深刻な、壊滅的ですからあり得る、結果を招く危険性をはらんでいます。ならば、国際社会の眼前にある次なる仕事は、国家間の政治と権力の機構が、いよいよ、協力と和合に向かっている、と確約することです。

国際連合が百周年を迎える時には、同じ一つの祖国に暮らす、わたしたちすべてが、来たる何世紀にもわたって進歩を持続するのに必要な世界秩序を建設するために、その現実的なプロセスを始動させた、と胸を張ることはできないのでしょうか。これはバハイ国際共同体の望みであり、その実現に向けて懸命に取り組んでいる目標です。人々の諸事の指導者たちと裁定者たちについて、昔日、痛切な思いが込められたバハオラの嘆願の声がこだまします。「互いに協議するがよい。そして、現状を案じて十分な討議を行い、病んで、ひどくいためつけられている世界が必要とする治療薬を施すがよい」。